

論文題目

「意味のイノベーション」の発展的批判と実践可能性拡大のための理論的再解釈

氏名 : 井登 友一

博士論文要約 :

本論文は、イノベーション研究において従来のイノベーション概念に対する新たな視座を提唱する「意味のイノベーション」を主題とし、当該概念に内在する理論的観点での矛盾および実践にあたっての課題を乗り越えるべく他の理論的枠組み、および理論的視座を援用することでイノベーション実践理論としての完成と発展を企図する研究をまとめたものとなる。

第1章において、従来の技術主導型イノベーションおよび市場牽引型イノベーションによる新たな価値創造に関する閉塞感を打開する第三の道としてロベルト・ベルガンティ (Roberto Verganti) によって提唱された「意味のイノベーション (以下: IoM)」について、イノベーション研究において従来革新対象として扱われてこなかった「意味」に着目する概念的な新奇性と独創性を評価したうえで、ベルガンティが掲げる IoM の二大原則である「内から外へのイノベーション」および「批判精神」について実践者が適切に理解し、実践するための手がかりとなる理論的説明をベルガンティ自身が十分に為していない点を批判し、両原則が抱える矛盾と問題を他の理論的枠組みを用いて考察し説明できる状態にすることで、IoM をイノベーション実践理論として理論的に補完し完成しうる可能性を提示した。

第2章では、IoM の第一原則が抱える矛盾について、ベルガンティが当初は最も重要な概念としていた「デザイン・ディスコース」に注目し、その意味を先行研究のレビューを通して読み解くことで、IoM の主体となる「自分自身 (ひとり)」とは、周囲の関係性から分断され孤立した「主体としての個人」ではなく、デザイン・ディスコースという多様なアクターから構成される複雑な関係性ネットワークを構成する一員として存在する個人が、関係性の中で一時的な局面において主体としての役割を「与えられる」存在であることを示した。そして、IoM において重要となるのは個人の超越的な資質やビジョン以上に高質なデザイン・ディスコースの形成にあるという考え方をあぶり出すことで、理論的な説明が補完されることを示した。

第3章では、この理論的説明の妥当性について企業事例の考察を通して確認すると共に、従来属人的と考えられがちなイノベーション (新規事業創出) における主体性は個人に閉じたものではなく、関係性ネットワークにおける集団的な言表行為によって生成され主体化されるものであるという構造をフランスの哲学者であるジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) と、同じくフランスの精神分析家であるフェリックス・ガタリ (Félix Guattari) によるアジャンスマン概念を用いることで導出した。

続く第4章では、IoM の第二原則として掲げられている「批判精神」の真意について、ベルガンティが抽象的かつ一般的な説明に留めてしまっていることが実践者にとって適切な概念理解を困難にさせ、実践の障壁となっている点を指摘し、フランスの政治哲学者ジャック・ランシエール (Jacques Rancière) の批判概念を用いることで改めて理論的に説明することを試みた。結論として、ランシエールの批判概念を視座として IoM の批判精神を読み解くことで、ベルガンティ

が本来提唱しようとした批判概念の真意とは、あらゆる二元論を中断（宙吊り）し、安易な二項対立的枠組みから距離をとることで既存の意味体制を解体する行為であり、より良い新たな意味体制を再配置することによる既存価値を解体した新たな価値創出を企図するための営みであることが説明できた。

第5章においては第4章において行った理論的説明の妥当性について企業事例の考察を通して確かめたうえで、最終章となる第6章において本論文全体の論考の整理と結論の提示を行った。

本研究が行った「意味のイノベーション」の理論的完成および再解釈は、企業や組織においてイノベーション実践を志向する多くの実践者が新価値創出活動に挑む際の理論的枠組みの提供と実践着手を促す緒を成すことに貢献する示唆を提示するものである。

以上